保護者を「対応する相手」から「一緒に育てる仲間」へ

― 困ったときだけでなく、うれしいときにもつながる ―

保護者対応という言葉から、苦情や難しい相談を思い浮かべがちです。でも、全公教調査では「保護者・PTAとの連携」にやりがいを感じる教頭も半数を超えています。課題が起きたときだけ連絡するのではなく、子供の成長や学校のよさを共有し、「一緒に育てる仲間」としてつながる機会を増やすことが大切です。日頃の小さな信頼の積み重ねが、難しい場面で対話できる土台になります。

工夫1 担任に「よい連絡」を促し、支える

- 担任に子供のよい姿の連絡を促す。
- 教頭が見つけたよさも担任に返す。
- 負担の少ない伝え方を一緒に考える。

工夫2 保護者の願いを聞く

- 子供にどうなってほしいかを聞く。
- 不安と要求を分けて受け止める。
- 子供のための共通目標を探す。

工夫3 できることを一緒に探す

- 学校・家庭のできる一歩を決める。
- 無理な約束はせず確認して返す。
- 次に確かめる時期をそろえる。

工夫4 PTAをお願いする場だけにしない

- 得意や希望を聞く。
- 無理なく選べる参加方法を用意する。
- 参加した感想を次に生かす。

工夫5 感謝を具体的に返す

- 何が子供や学校に役立ったかを返す。
- 写真や子供の感想も添える。
- 対応後も「その後どうですか」とつながる。

明日、ちょっとやってみよう

1 担任に子供のよい姿の連絡を促す。
2 子供にどうなってほしいかを聞く。
3 学校・家庭のできる一歩を決める。
4 得意や希望を聞く。
5 何が子供や学校に役立ったかを返す。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・教職員支援機構『コーチングのスキルと活用IV～円滑な保護者対応に生かす～』校内研修シリーズNo.163（令和7年1月16日）。
・文部科学省『学校と保護者・地域住民等とのより良い関係構築のためのガイドライン』（令和8年8月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

保護者を「対応する相手」から「一緒に育てる仲間」へ

― 困ったときだけでなく、うれしいときにもつながる ―

工夫1〜3：関わりの意図と具体的な進め方

工夫1 担任に「よい連絡」を促し、支える

担任に、子供のよかった行動や成長を保護者へ伝えるよう働き掛けます。「困ったときだけの連絡」にしない大切さを共有し、教頭が見つけたよい姿も担任に返します。件数を一律に求めず、短い電話や一行の連絡など無理なくできる方法を一緒に考え、担任と保護者の関係づくりを支えます。
教頭が全家庭への連絡を引き受けるのではなく、担任が伝えやすい材料と方法を用意します。例えば「友達に説明していた姿」を担任へ短く知らせます。連絡の件数を評価したり、勤務時間外の電話を常態化させたりせず、学校の連絡手段と時間のルールの中で支えます。

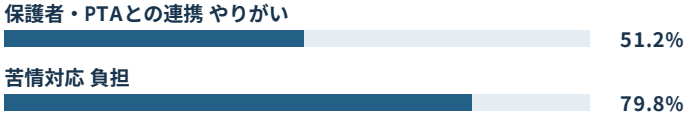
工夫2 保護者の願いを聞く

要望の表面だけでなく、「子供にどうなってほしいか」を尋ねます。強い言葉の奥にある不安や心配を分けて聴くことが大切です。学校と家庭の共通目標が見つかりやすくなります。「子供のために」という共通点を言葉にすると、話合いが前に進みます。「何をしてほしいですか」だけでなく「何が一番心配ですか」と尋ねます。
「授業中、安心して過ごせるようにしてほしいのですね」と、受け止めた願いを確かめます。保護者の説明と学校が確認した事実に違いがあれば、どちらかをすぐ否定せず、確認が必要な点を整理します。共感を伝えることと、要望をそのまま約束することは区別します。

工夫3 できることを一緒に探す

学校だけ、家庭だけで解決しようとせず、それぞれができる一歩を決めます。学校でできること、家庭でできること、必要なら専門機関に頼ることを整理します。「対立」より「共同作業」に変えていきます。次に確認する時期まで決めると、互いに見通しをもちやすくなります。できる・できないを曖昧にせず、学校として確認して返す期限を伝えます。
教頭は、担任だけで約束できない事項を校長と整理し、学校で実行できる選択肢を用意します。「学校がすること」「家庭に相談すること」「次に確認する日」を短く記録し、説明の食い違いを防ぎます。合意できない点が残ったときも、決まった点と未決の点を明確にして返します。

全公教調査から



令和8年度 全校種計21,512人・複数回答
数値の出典は下部の参考資料欄を参照。

調査は教頭の職務への受け止めを示すものです。ここで紹介する工夫の効果を実証した調査ではありません。

参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・教職員支援機構『コーチングのスキルと活用IV〜円滑な保護者対応に生かす〜』校内研修シリーズNo.163（令和7年1月16日）。
・文部科学省『学校と保護者・地域住民等とのより良い関係構築のためのガイドライン』（令和8年8月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。

保護者を「対応する相手」から「一緒に育てる仲間」へ

― 困ったときだけでなく、うれしいときにもつながる ―

工夫4・5：関わりを続ける工夫と場面別の判断

工夫4 PTAをお願いする場だけにしない

保護者の得意分野やアイデアを、学校づくりに生かします。無理のない関わり方を複数用意し、参加の形を選べるようにします。参加してよかったと思える役割をつくります。子供の反応や成果を後から伝え、「役に立った」が見えるようにします。PTAや行事では、準備する側だけでなく参加した保護者の感想も次に生かします。
協力をお願いするときは、活動の目的、時間、費用、安全面、参加の選択肢を分かりやすく示します。参加できない家庭が不利益や引け目を感じないよう配慮します。役員や一部の家庭だけに調整が集中していれば、学校側の準備や連絡の仕組みも見直します。

工夫5 感謝を具体的に返す

「ご協力ありがとうございます」だけでなく、何が子供や学校に役立ったかを伝えます。具体的な事実を添えると、形式的ではない感謝になります。保護者も学校の一員としての手応えを感じられます。教頭自身も「助けてもらった」と素直に伝えることが関係づくりになります。対応後こそ一度連絡し、「その後どうですか」と関係を切らません。苦情の件数をゼロにすることより、「何かあれば話せる」と思ってもらえる関係を日頃からつくります。保護者の言葉を担任へ返すときは、強い表現だけでなく、その奥にある願いや心配も一緒に伝えます。
感謝は次の協力を得るための条件にせず、その活動で子供に生まれた変化を具体的に返します。一方、威圧や過大な要求などで通常の対応が難しい場合は、教頭や担任が一人で受けず、校長・教育委員会等と対応方針をそろえます。協働する姿勢と職員を守る組織的対応を両立させます。

場面で考える（想定例）

保護者が担任への不信を強く訴えたら

教頭は訴えを落ち着いて聴き、確認した事実と未確認の点を整理します。担任の言い分だけで否定せず、同時に担任へ要望をそのまま背負わせません。校長と方針をそろえ、誰が、いつまでに、何を確認して返すかを伝えます。担任を支えることと保護者の願いを聴くことを両立させます。

自校で試し、確かめる

実践ページの五つの工夫から、今の学校で取り組めるものを一つ選びます。誰に、どの場面で働き掛けるかを具体化し、一週間程度を目安に、本人や関係者と変化を確かめます。続ける点と変える点を一つずつ決め、記録を増やし過ぎずに次の実践へつなげます。

振り返りの問い

- 本人の考えや希望を確かめたか。
- 教頭と担当者の役割は明確か。
- 続けること・変えることは何か。



参考資料・出典（実践・解説①・解説②共通）

・全国公立学校教頭会『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（小・中）』『令和8年度全国公立学校教頭会 Web用・集計結果（義務・一貫）』設問14・15（やりがい・負担）。全校種計21,512人の回答を合算。
・教職員支援機構『コーチングのスキルと活用IV～円滑な保護者対応に生かす～』校内研修シリーズNo.163（令和7年1月16日）。
・文部科学省『学校と保護者・地域住民等とのより良い関係構築のためのガイドライン』（令和8年8月）。

具体的な手順・声掛け・想定場面は、参考資料を踏まえた独自の実践提案です。